

# 渡り鳥滞在1カ月短く

## 20年間で 地球温暖化、影響か

東京都市大調査

秋に飛来し、春先に北の繁殖地に飛び立つ渡り

鳥（冬鳥）の日本での滞在期間が1986年に比べて約1カ月も短くなっていることを、横浜市内で

の観察データを基に、東京都市大の小堀洋美教授（保全生物学）が3日までに、突き止めた。

渡り鳥が日本に来る時期が遅く、旅立ちの時期は早くなっているため、地球温暖化と都市部のヒートアイランド現象の結果、横浜市の年間平均気温が約1度高くなっ

たことが、鳥の渡りに影響を与えたらしい。同様の傾向は北海道や九州の渡り鳥でも見られているという。

地球温暖化が渡り鳥の行動に影響を与えるとの報告は、欧州や米国ではあるが、日本での調査は少なく、温暖化の生物への影響を知る上で貴重なデータとなりそうだ。

同市内の「横浜市民の森」では86年から、日本野鳥の会や市の職員などが鳥の観察を続けており、記録から冬鳥が最初に見られた日（初見日）や最後に見られた日（終見日）などが分かる。小堀教授が、ウソヤアオシ、ツグミなど毎年飛来した6種類の冬鳥のデータを解析した結果、86



渡りの時期が温暖化の影響で変化していることが分かった渡り鳥の一つ、ツグミ（提供写真）

年から2008年までの間に、ほとんどの鳥の初見日が年々遅くなり、最も変化が大きいツグミではこの間に約19日遅くなっていた。逆に終見日は6種全てで早くなり、シヨウビタキでは、36日も早まっていた。この結果、6種平均で半年余りだった日本での滞在期間が29・7日短くなった。小堀教授は「温暖化の影響は今後、さらに顕著になるとされる。渡りなどの生態の変化が種の生存、その種とつながりを持つ他の生物や生態系に与える影響などを含めて、さらに詳しい研究が必要だ」と話している。